

百灯笼籠に出演して

文・佐原一哉

八月十七日、玄松院の施食供養、百灯笼籠のコンサートにお招きいただき、ありがとうございます。お盆という古謝美佐子の住む沖繩では、旧盆に「エイサー太鼓」を打ち鳴らして道を練り歩き、各家庭で先祖をお迎えしお送りするという風習が一般的です。私が住む本土でもお寺に檀家さんが集まるという習慣がほとんどなくなつたため、我々にとつ



●「童神」をうたう古謝美佐子さん(左)。右が佐原一哉さん。

ても感動的な催しでした。まず、何よりも数人のお坊さんがお唱えになるお経の素晴らしさです。三浦副住職からあとで陀羅尼というお経であると教わりましたが、呪文のような言葉の響きに意味もわからず感動します。意味がわからないお経だからこそ、頭よりもカラダそのものに訴えかけるのでしょうか。

住職の素晴らしいお話や、日本人の祈りの原点を見るようなご詠歌の響きにも心を打たれました。「若葉会」のみなさんの踊りにも和みました。盆踊りというのは普通、お寺の境内や学校の校庭等で踊られるものでしょうから、お寺の本堂で盆踊りを踊られること自体が驚きです。古謝美佐子は「長生き音頭」にすっかりはまってしまい、当日司会をされていたカフエミルトンの三浦マスターにあとで頼み込み、翌日音源をいただき「今度、沖繩の老人ホームで歌おう」と早速歌詞をマスターしています。またそのあとの花火大会でマイク片手に派手に花火の実況中継をする副住職のお姿は、お寺のお坊さんとはとても思えず、微笑んで

しまいました。そういった親しみやすさが、身近なお寺として、檀家さんと垣根のない関係を作っておられるのだと感じました。以前、仙台のラジオ番組でお会いしたこのあるこの副住職から「私のお寺でお盆の法要がありますので沖繩の歌を歌ってくれませんか」とお誘いがあった時は、即答で承諾しました。

震災以後、東北各地で慰問演奏を何回か行ってきましたが、行く先々で我々が勇気を与えるというよりも、逆に元気をいただいている感じがしています。五月に石巻の大川小学校を訪れました。曹洞宗のお坊さんから、亡くなった子供たちのお話を聞いて以来、古謝は子守唄「童神」の歌詞「雨風の吹き渡るこの浮き世で、傘となって自分の子供を守る」という意味の三番の歌詞が歌えなくなり、自然に対する人間の小ささ、亡くなった子供たちの無念の想いが頭を駆け巡るからだそうです。でも、悲しんでばかりもいられません。沖繩でも県民の四人に一人が亡くなった太平洋戦争で残された者同士が励まし合い立ち直りました。そこにはいつも歌がありました。今回も賑やかな「安里屋ユンタ」で、お客さんも一緒に歌っていただきました。またそれにも増してこの歌のあいだ、



副住職編集 玄松院 寺報 三浦 正恵 〒987-0024 宮城県遠田郡美里町中峠字十二神117

坊さんカフェ

私(副住職)は今、坊さんの出前喫茶「カフェ・デ・モンク」に参加しています。カフェ・デ・モンクは、坊さんの有志が集まって被災した沿岸部に行きコーヒーとケーキをふるまうボランティアです。車四〜五台に分乗し(一台はテーブルや椅子を積んだ軽トラ)、目的地に着くと即仮設喫茶をこしらえます。みなさん昼食を終えてひと息つくころに午後一時に開店。前もって区長さんや世話人に開店時間をお知らせしておきますので、開店前からぼつりぼつりとお客さんが集まりはじめます。

津波で多くのものを失ってしまった被災者のみなさんは、表向きは元気です。でも、元気にふるまわなければ自分が底なしに落ち込んでいくことを知っている。愚痴のひとつやふたつあるだろう。行政に文句のひとつも言いたいだろう。でも言えない。みんな我慢をしている。そこに行つて話を聞く。「傾聴」がボランティアの真の目的です。

今まで私が行つたのは、南三陸町細浦地区。津山町横山地区。石巻市蛤浜。石巻市大原浜。鮎川公民館。本吉で被災し、買ったばかりのプリウスと船三隻を津波で失い、細浦に避難してきている漁師のおじさんは昔、遠洋漁業でヨーロッパやアメリカをまわつた話をしてくれました。横山地区の仮設住宅で暮らしているおばさんは懇意にしている看護婦さんが押し寄せる津波のなかで死を決意しマジックインキで自分の腕に名前を書いた話をしてくれました。「なぜ名前を書いたかわかるでしょ」

蛤浜のカフェ・デ・モンクは耕峰寺の庭でおこないました。ALTのみなさんでしょうか、外人さんが五〜六人クレヨンやスケッチブックを持って合流してきました。子どもたちにプレゼントをしまわっているのだそうです。国籍は違つても支援したい気持ちは同じです。私たち

はすぐ打ち解けました。「お経を聴きたい」と外人さんたちに言われ、急遽本堂にあらせてもらつて般若心経をあげること。般若心経をあげ「東日本大震災物故者の霊に供養し奉る」と回向しました。横を見ると、外人さん全員が正座して手を合わせています。そのうしろには、いつのまにあがったのか、カフェに来ていたすべてのみなさんが座つて合掌していました。

大原浜の公民館前はスクールバスの発着所になっていて、帰りのバスに乗る前に小学一年生くんたちがカフェに寄つてくれました。ブルーベリーの粒がまぶされたケーキをほおばりながら、隣の女の子に「おいしね」と耳打ちする男の子。その男の子が私に言います。「セイヤ君じゃないんだよ」。女の子が言います。「わかなちゃんもいないんだよね」。

津波で亡くなったのか、遠くに避難していいのかわからない。私には「そうなんだあ」と相づちをうただけです。子どもたちだつて怖さや切なさをうちあげたがついてくる。子どもたちの前にひざまずき、彼らの声にまず耳をかたむけてあげる。その効能がじわじわと後々、効いて



南三陸町細浦地区にて

くれば良い。漢方薬みたいなボランティア活動です。カフェ・デ・モンクはBGMにゼロニアス・モンクをかけたたりして、一応シャレしています。でも、隣の客に関心を示さない外資系カフェなどの雰囲気とは違います。どちらかというとどこ近所さんとお茶つこ飲みのお場です。「俺、このボランティア似合つてるよな。なぜだ?」…ふと浮かんだのが玄松院の茶の間。「な〜んだ玄松院では朝からお茶つこ飲みしてるじゃん!」

被災地でのお茶つこ飲み「カフェ・デ・モンク」は、秋以降も続きます。

77.1 Mhz 『カフェ・デ・モンク』十月七日から放送開始 毎週土曜日、朝八時〜八時二十五分(デイトFM)

東北新幹線古川駅から徒歩1分

くらしま齋苑

内覧随時受付中!

お気軽にお電話ください

大崎市古川駅前大通2-4-12

総合案内

0229-23-9111

苦しみが人を鍛えるきた

創刊号にご登場いただいた石崎操先生が三月二十二日、百歳にられました。百歳を記念して二回目の「登場です」。「眼はこころの窓」と言います。やさしく穏やかで、ときに厳格な眼差しの奥にあるこころの言葉に耳をかたむけてみましょう。

正恵 百歳まで生きてこられた健康の秘訣はなんでしょう。

石崎 心にわだかまりを持たないことです。自然のままに。自然に逆らってはダメです。素直に生きる。謙虚にね。いつでも反省して。そして心になにも残らない方がいい。それだけです(笑)。

正恵 食べるものには気をつけていますか。

石崎 はい。まず油ものとお肉ははじめから除けます。「お父さん(正昭さんのこと) 助けでけらいん」と言ってる。自分が食べるのいいぶんだけに。そして、まんべんなくいただくんです。そんなにつばいだけださないし、残すのもつばいがない。「ごめんね」と言ってる。最初から西洋皿に移す。そうすると不味くならないでしょ。

そのかわり、月に一回か二回、美味いものを食べに行きます。妹

が二人いますんでね。「姉さん、あそこに行くべし」って誘ってくる。

そうすると団地のお嫁さん(次男である望さんの奥さま)に連れて行ってもらおう。みんなでお相伴にあずかるんです。とーっても美味しい！お話も弾みますしね。

正恵 百年生きてこられて、まさかこんなに大きな地震に遭うとは思わなかったですよ。

石崎 はい。数百年に一度なそうです。私、足を痛めて、目に遭いました。水分はとりたくない。ご飯は食べたくない。ストレスもたまりました。地震後に具合が悪くなって亡くなるお年寄りが多いのはあたりまえのことなんです。そんなとき、まだ鉄道もなにも復旧していないときに、横浜からバスを乗り継いで孫が来てくれたの。散らかったのを孫に片づけてもらったんです。私なんか恵まれている方です。



正恵 先の戦争で日本はどん底に落とされ、そこから立ちあがってきました。それを、今回の被災からの復興の参考にするのであれば、その原動力となったものはなんですか。

石崎 愛情じゃないでしょうか。理屈ではない。親が子どもを育てるその愛情。それを返す子どもへの愛情。絆でしょうか。

正恵 家族のなかで戦死する人がいたり、食べるものがないにもない状況のなかで愛情をもって育てるといことはむずかしかったのでは？

石崎 むずかしい。夕食のおかずのお魚がこんなポツリしかない。親は、それを食べないで子どもに食べさせる。子どもはそれを見ている。そうすると次の日「お母さん、どんじよ獲ってきたからね」。子どもはものわかりがいい。行動も早い。お父さん(喜久男さん)が大きなどんじよを作って、作業場の壁にぶらさげただ。それを使ってどんじよを獲ってきたんです。それが家族のタンパク源になった。どんじよで子どもたちに養われました。

あと、カボチャの茎をちゃんと皮をむいて切ってくれた。それを、おつゆの実にしたんです。美味しいんですよ。

それからこの長い道路におがっている菜っ葉(食べるのいい菜っ葉

ね)、田んぼの側のは泥が付いていない、綺麗なんです。それを息子が高良さい(高橋良一さん宅)の方まで行って摘んでくんの。それを鍋だの釜だの置いておく棚っこに洗って並べておいてくれた。私が夜学から帰ってくるのが遅いものですからね。子どもたちに助けられたんです。

息子(允さん)が亡くなる二日前、畑の草取りをすると私昼寝するんです。昼寝をしていると「おばあちゃん、おばあちゃん」大きい声でふた声呼ばれた。ハッと目覚めた。息子が会いにきたんですね。その二日後でした、亡くなったの。愛情とはこういうことをいうのだろうか、と思います。

石崎 この震災があったからですよ。震災がなければ、若い人たちは自分の楽しみだけを求めて歩いていました。ただあの悲惨な状況を見たら自分のことよりも困っている人たちをお助けしなけりやならない。あわれみの心が生まれた。これはいい教育じゃないんですか。

なにか政治家よ、と思います。

正恵 原発はどうにからないものでしょうか。

石崎 どうにかならないかというより、止めさせなきゃならないものです。それをいつまで引つ張っていくんだか。

正恵 いつからこうなったのでしょうか。

正恵 剥がして？

石崎 だってね、いっぱいあるとお年寄りは見づらい。だから一枚ずつ剥がして読む。そして膝の上において読ませていただく。それを表裏見ます。自分の読みたいものはじっくり読んで、脇さ重ねていく。年寄りには苦勞します。目が疲れてきますしね。だからいろいろ工夫するんです。

石崎 明治時代からですね。江戸時代までは本当に自然のなかの日本でしたから。明治になって、外国との交渉が頻繁になると外国の真似してカネと権力に腰かけて、日本を栄えさせるだのなんだのついでいろいろなモノを作って原発まで作って。結局自分たちの利権のためでないの。

どうして世の中を自然に推移させないのかなあと思います。自然というものは遅いものですかね、うつりかわりが。

正恵 私には小学生のとき石崎先生におしえられたお陰で数学は得意なほうでしたが、中学三年におそわった高橋正勝先生も良い先生でした。いよいよ中学も終わりという最後の授業で正勝先生は「平行線」の話をしたんです。平行線はどこまでいっても平行です。

石崎 はい。

正恵 「でも、宇宙の果てまで伸ばしていったとする。平行のままなのだろうか？」

石崎 良い先生におそわりましたね。私たちの時代は、公式の暗記一辺倒だったから。

正恵 疑ってかかってみよ、というヒントを卒業する直前にあたえられたのは幸運でした。

石崎 良かったですね。本当にそのとおりだから。行き着くところは同じでも、途中をいろいろ考えるのがおもしろいんです。数学って。

天の神さまがこういう天災を与えらるというのは、無慈悲だと思ってしまう。人間の成長に良い薬を与えてくださったということもある。もし震災がなかったら、こういうボランティアの若者は育たなかった、そう思います。

しあわせあれば苦しみあり。苦しみあれば人間が鍛えられて人間らしくなる。お釈迦さまがどうしてあんなにいい生活から困った生活に入ってきたか？ 困った生活になれたから、お釈迦さまになれたんだなと思います。あまり恵まれていると他人を思いやる気持ちがないものです。神さまというのは(人間社会を)よく

く作ってくれたもんだと思います。

原発問題は命の問題

正恵 ただ原発事故は人災です。福島第一原子力発電所の近くのかたがちが強制的に避難させられています。自分が住んでいたところに早く帰りたい。でも放射線量がものすごく高い所に家があるかたたちはもう帰れないですよ。

石崎 帰れないでしょうね。結局、原発問題は「命の問題」なんです。放射線の影響で日本人の生命が何年後にどうなるかわからない。「命の問題」なのに、まだカネと権力が先

新聞は一枚ずつ剥がして読む。

(七月八日、石崎宅で収録)